

体型に関わる損得意識と瘦身願望

—男女青年の比較による検討—

小島 弥生*・浦上 涼子**・沢宮 容子***

Influences of a Profit-and-Loss Mindset about Body Shape on Drive for Thinness in Adolescent Males and Females

Yayoi KOJIMA, Ryoko URAGAMI, and Yoko SAWAMIYA

The purpose of the present study was two points. One was to check the structure of the profit-and-loss mindset about body shape. The other was to examine the effects of these mindsets and approval desire (praise-seeking, rejection-avoidance) on the drive for thinness through the comparison of male and female youth. 323 adolescent men and 230 adolescent women responded to the questionnaire, of which 146 men and 187 women, answered that want to lose weight. Factor analysis suggested four mindset; two profit mindset and two loss mindset. Primary profit mindset consisted with benefit of thin body, and secondary profit mindset was self-affirmation. Primary loss mindset consisted with concern of appearance, and secondary loss mindset was concern of negative evaluation. In multiple group structural equation modeling, most paths have common influence between men and women, but several paths were different effects.

key words: drive for thinness, profit-and-loss mindset about body shape, adolescent, praise-seeking, rejection-avoidance

問題と目的

21世紀の日本社会では、特に10代、20代の女性の体型が極端な痩せの傾向にある。例えば、厚生労働省の「二十一世紀における国民健康づくり運動（健康日本21）」では、20代女性の体型については中高年齢層とは異なり、痩せることではなく太ることを推奨し、BMI(Body Mass Index)が18.5未満の「やせ」型に分類される20代女性の割合を15%以

下にすることを目標値として設定していた。ところが、2000～2012年度にわたる「健康日本21」で設定されていた上記の目標値が、第二次期（2013～2022年度）には20%以下へと下方修正されている（厚生労働省、2012）。裏返せば、それだけ痩せた若い女性の割合が現実には多いことを意味する。

若い女性のみならず、日本社会全体において瘦身は賛美される傾向にある。田中(2001)は、摂食障害の治療に関し、極端な瘦身を志向する文化に注目

* 埼玉学園大学人間学部

Faculty of Humanities, Saitama Gakuen University 1520 Kizoro, Kawaguchi-shi, Saitama 333-0831, Japan
e-mail: y.kojima@saigaku.ac.jp

** 明治学院大学心理臨床センター

Institute for psychological research, Meiji Gakuin University 1-2-37 Shirokanedai, Minato-ku, Tokyo 108-8636, Japan
e-mail: uragamix@psy.meijigakuin.ac.jp

*** 筑波大学人間系

Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba 1-1-1 Tennodai, Tsukuba-shi, Ibaraki 305-8577, Japan
e-mail: sawamiya@human.tsukuba.ac.jp

し、社会と個人との関係の中で摂食障害を捉えなおす必要性を指摘している。また、浦上・小島・沢宮・坂野(2009)は現代社会において性差を意識する場面が減少し、男性の美意識が女性化してきた結果として、従来は女性が中心であった摂食障害患者に少なからず思春期・青年期の男性も存在するようになった可能性を指摘している。

このように、瘦身が賛美される社会文化的背景は、個人の「瘦身願望」を強める可能性があり、そうした「瘦身願望」が摂食障害の一因となっている。したがって、瘦身願望の心理的メカニズムを明らかにすることは、摂食障害の治療の一助となるだろう。

瘦身願望の背景因として、馬場・菅原(2000)は「体型に関わる損得意識」に関する検討を行っている。つまり、痩せることによって期待できるメリット感と、現在の体型のままであることのデメリット感である。馬場・菅原(2000)は女子大学生・女子短大学生を対象に調査を実施し、現在の体型のままであることのデメリット感は瘦身願望の直接的な要因とはならないこと、および、デメリット感が痩せることのメリット感を強めることにより瘦身願望に影響するという媒介効果があることを示している。青年期の女性にとっての瘦身願望は、痩せることが自分にとって何らかのメリットがある(積極的に得を求める場合もあれば、損をしないために得を求める場合もあると思われる)と感じることで生じると考えられる。

同じく「体型に関わる損得意識」を元に、青年期の男性の瘦身願望に関する心理的メカニズムについて検討しているのが浦上他(2009)である。この研究では痩せることによって期待できるメリット感を「自己視点からのメリット感」と「他者視点からのメリット感」に分けて瘦身願望に至るメカニズムの検討を行っている。自己視点からのメリット感とは、痩せることによって自己肯定感が得られたり自信が向上したりすることを指す。一方、他者視点からのメリット感とは痩せることによって他者からの評価が変わることを期待することを指す。そして、馬場・菅原(2000)の青年期女性を対象とした知見とは異なり、浦上他(2009)は、青年期男性では現在の体型のままであることのデメリット感が直接、瘦身願望を強める効果があること、さらに、デ

メリット感が他者視点・自己視点の両メリット感を強めるが、他者視点メリット感は瘦身願望を強める直接効果はなく、自己視点メリット感を媒介して瘦身願望を強める間接効果があることを示している。

また、内海・西浦(2014)は、浦上他(2009)の用いたメリット感およびデメリット感の項目を女子大学生に尋ねて瘦身願望ならびに食行動異常との関連を検討しているが、「体型に関わる損得意識」の因子構造が浦上らとは異なり、メリット感が1因子にまとまること、デメリット感がメリット感を媒介して瘦身願望を強める間接効果をもつことを示している。

このように、先行研究において「体型に関わる損得意識」が瘦身願望に至るメカニズムは男性と女性で異なる可能性が示唆されているが、いずれの研究も男性と女性を別々に検討しており、単純に比較することが困難である。そこで本研究では、瘦身願望をささえる要因としての「体型に関わる損得意識」、つまり瘦身のメリット感および現体型のデメリット感について、男女青年を比較できる形で検討することを目的とする。

方 法

調査時期と調査対象者

2009年6~7月および2011年4~5月に、首都圏にある計4カ所の私立大学に在籍する大学生585名(男性337名、女性248名)を調査対象者とした。平均年齢は19.9±3.30歳、年齢の範囲は18~58歳であった。

調査方法

心理学の授業時間を用いて調査への協力を呼びかけた。調査実施者あるいは授業担当者が質問紙を配付し、回答は強制ではなく自由意思によること、調査に協力しないことによる不利益は一切ないことを口頭ならびに質問紙の表紙を用いて説明したのち、協力の意思のある学生に回答を求めた。

質問項目

複数の質問項目からなる調査用紙の内容のうち、本研究の分析対象とした項目は以下の通りであった。

1. **瘦身願望尺度** 馬場・菅原(2000)が作成した11項目の尺度について、全く当てはまらない(1)~非常によく当てはまる(5)の5件法で回答を求め

た。11項目の内容は「痩せたい」という意識の強さを測定できるように作成されており(項目例, 「今, 痩せることに一番興味がある」, 「何が何でも体重を減らしたい」), 作成者により尺度の構成概念妥当性と信頼性が確認されている。以下, この尺度で測定した得点を「瘦身願望」と示す。

2. 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度 小島・太田・菅原(2003)が作成した18項目(賞賛獲得欲求と拒否回避欲求が各9項目)からなる尺度について, 全く当てはまらない(1)~非常によく当てはまる(5)の5件法で回答を求めた。この尺度は, 他者の注目を集め自己に関する肯定的な評価を獲得しようとする傾向である賞賛獲得欲求と, 自己に関する他者からの否定的な評価を回避しようとする傾向である拒否回避欲求の2つの承認欲求と測定するために作成された尺度であり, 作成者によって並存的妥当性と再検査信頼性が確認されている。以下, この尺度で測定した得点を「賞賛獲得」ならびに「拒否回避」と示す。

3. 体型に関わる損得意識 調査の実施に先立ち, 大学生138名(男性84人, 女性54人)を対象に予備調査を実施した。先行研究(馬場・菅原, 2000; 浦上他, 2009)にならぬ, 「もし今より痩せられたら…」と「今の体型のせいで…」という書き出しからなる2つの文章を完成させる自由記述式で回答を求め, 集めた回答を内容の類似性で整理し, 各々の概念を抽象化したラベルを作成し, 分類した。その結果をふまえ, 痩せることのメリット感について14項目, 現体型のデメリット感について13項目, 計27項目を作成し(Appendix I), 本研究の調査に用いた。全く当てはまらない(1)~非常によく当てはまる(5)の5件法で回答を求めた。

4. 現在の体型と魅力的な体型 浦上他(2009)にならぬ, 質問紙に身長140~199 cmまで1 cm刻みで, BMI (Body Mass Index)による標準体重(身長(m)×身長(m)×22)の一覧表を示した。回答者には, 自分の身長に対応する標準体重を基準に, 自分の現在の体重および魅力的と思う体重がそれぞれ標準体重からどのくらい多い(あるいは少ない)かについて, 回答を求めた。この回答を用いて先行研究(浦上他, 2009)と同様に「落差」という指標を算出した。現在の体重と標準体重との差をA (kg), 魅力的な体重と標準体重との差をB (kg)としたとき,

A-Bの値が「落差」となった。落差がプラスであれば, 現在の体重を下回る体重が魅力的であると考えていることになるため, 落差がプラスの値の回答者は「痩せたい」と考えている者とみなされた。一方, 落差の値がマイナスの値および0の値をとった回答者は, 「太りたい」もしくは「少なくとも痩せたくない」と考えている者とみなされた。

分析方法

データ解析には, IBM SPSS Statisticsのver.22.0およびIBM SPSS Amosのver.22.0を用いた。

結果

分析対象者

調査対象者585名のうち, 30歳以上の回答者は青年期ではないと考え, 分析対象から除外した。また, 回答に欠損のあった回答者も分析対象から除外した。その結果, 553名(男性323名, 女性230名, 平均年齢19.6±1.48歳)が分析対象者となった。

553名のうち, 落差がプラスの値となった者は333名(男性146名, 女性187名)であった。彼らを「痩せたい男性」, 「痩せたい女性」という名称で以下は示していく。また, 落差がマイナスおよび0の値であった220名(男性177名, 女性43名)については, 以下, 「痩せたくない男性」, 「痩せたくない女性」と示す。

本研究の目的の1つは瘦身願望の背景因として想定される「体型に関わる損得意識」について検討することである。これらの意識は「痩せたくない男性」や「痩せたくない女性」では回答の分散がほとんどみられないことが予想される。そこで, 「痩せたくない男性」と「痩せたくない女性」は「体型に関わる損得意識」の記述統計を「痩せたい男性」や「痩せたい女性」と比較する場合にのみ分析対象とし, 「体型に関わる損得意識」を検討するための因子分析, および, 瘦身願望に関するモデルの検討には「痩せたい男性」146名と「痩せたい女性」187名のデータのみを用いることとした。

体型に関わる損得意識の因子分析

上述のように「痩せたい男性」と「痩せたい女性」計333名のデータを用いて, 体型に関わる損得意識を尋ねた27項目について因子分析(最尤法・プロマックス回転)を実施した。共通性の低い項目, どの因子にも負荷量の低い項目を除外して因子

Table 1 因子分析（最尤法・プロマックス回転， $n=333$ ）

| 項目（省略形） | 因子 1 | 因子 2 | 因子 3 | 因子 4 | 共通性 |
|--------------------------|--------------|---------------|--------------|---------------|-------|
| | 1 次的 メリット | 1 次的 デメリット | 2 次的 メリット | 2 次的 デメリット | |
| 26 かわいい（かっこいい）と思われる | .974 | -.027 | -.071 | -.027 | .800 |
| 27 モデルのような人間だと周りの人から思われる | .769 | -.303 | -.014 | .161 | .483 |
| 24 周りの人からスタイルが良いと認めてもらえる | .684 | .107 | .097 | .000 | .692 |
| 5 異性にもてる | .680 | .119 | -.024 | .059 | .592 |
| 6 自分の体型や容姿に自信がもてる | .594 | .315 | .152 | -.230 | .721 |
| 1 着られる服のバリエーションが限られる | -.104 | .952 | -.094 | .010 | .715 |
| 21 着たい服が着られない | .000 | .833 | .030 | .055 | .771 |
| 2 周りの目が気になる | .015 | .583 | .081 | .200 | .583 |
| 10 人前で明るくふるまえる | -.018 | -.012 | .974 | -.047 | .857 |
| 16 もっと自由にふるまえる | -.020 | .140 | .728 | .101 | .761 |
| 11 人から信頼される | .066 | -.204 | .644 | .280 | .603 |
| 12 毎日が幸せな気分ですられる | .258 | .045 | .637 | -.067 | .709 |
| 15 周りの人からバカにされる | -.003 | .106 | -.080 | .720 | .522 |
| 20 異性に注目されない | .191 | .123 | .005 | .567 | .566 |
| 8 身体の調子が悪い | -.054 | -.003 | .160 | .506 | .342 |
| | 負荷量平方和 | 6.095 | 5.034 | 6.218 | 3.776 |
| 因子間相関 | 因子 2 | .608 | | | |
| | 因子 3 | .757 | .627 | | |
| | 因子 4 | .456 | .443 | .594 | |

分析を実施した結果、最終的に Table 1 にまとめた 4 因子構造が得られた。

第 1 因子では痩せることのメリット感のうち 5 項目の負荷量が高くなった。5 項目は体型や容姿に関する他者からの評価あるいは自分自身の評価に関する項目であった。これらの項目は現在の体型から痩せることで直接感じることができるメリット感である。そこで第 1 因子は「1 次的メリット」と命名した。5 項目の信頼性を確認するためにクロンバックの α 係数を算出した結果、 $\alpha=.89$ の値が得られた。各項目の評定値を単純集計し、項目数で割った値を「1 次的メリット」の得点とした。

第 2 因子では現体型のデメリット感のうち 3 項目の負荷量が高くなった。これら 3 項目は現在の体型のままでいることから生じる直接的な制約に関する項目が中心であった。そこで第 2 因子は「1 次的デメリット」と命名した。信頼性の確認のために α 係数を算出した結果、 $\alpha=.85$ の値が得られた。各項目の評定値を単純集計し、項目数で割った値を「1 次的デメリット」の得点とした。

第 3 因子では痩せることのメリット感のうち 4 項

目の負荷量が高くなった。4 項目は痩せることに伴う自分自身への肯定的感情や他者からの信頼の獲得など、直接には体型や容姿とは関わらないメリット感であったため、「2 次的メリット」と命名した。信頼性の確認のために α 係数を算出した結果、 $\alpha=.90$ の値が得られた。各項目の評定値を単純集計し、項目数で割った値を「2 次的メリット」の得点とした。

第 4 因子では現体型のデメリット感のうち 3 項目の負荷量が高くなった。3 項目は体型や容姿についての他者からの否定的評価や健康への悪影響に関する項目であり、メリット感と対比させる形で「2 次的デメリット」と命名した。この因子を構成する 3 項目の α 係数は、 $\alpha=.69$ と他の因子に比べると低くなった。各項目の評定値を単純集計し、項目数で割った値を「2 次的メリット」の得点とした。

これら 4 因子の得点を「痩せたい男性」、「痩せたい女性」、「痩せたくない男性」、「痩せたくない女性」の 4 群間で比較した結果を Table 2 に示した。一元配置分散分析の結果、4 つの因子得点すべてにおいて群間に差があることが示された。多重比較の

Table 2 体型に関わる損得意識の記述統計

| 群 | n | 因子1 | | 因子2 | | 因子3 | | 因子4 | |
|---------------------|-----|-------------|---------|------------------------|---------|--------------|---------|---------------|---------|
| | | 1次的メリット | | 1次的デメリット | | 2次的メリット | | 2次的デメリット | |
| | | M | (SD) | M | (SD) | M | (SD) | M | (SD) |
| 全体 | 553 | 2.43 | (1.170) | 2.78 | (1.249) | 2.08 | (1.104) | 2.01 | (0.918) |
| 痩せたい男性 (男1) | 146 | 2.46 | (1.029) | 2.81 | (1.157) | 2.01 | (1.061) | 2.15 | (0.989) |
| 痩せたい女性 (女1) | 187 | 3.31 | (0.957) | 3.62 | (1.053) | 2.80 | (1.045) | 2.24 | (0.895) |
| 痩せたくない男性 (男2) | 177 | 1.56 | (0.819) | 1.97 | (0.943) | 1.45 | (0.766) | 1.73 | (0.844) |
| 痩せたくない女性 (女2) | 43 | 1.99 | (0.781) | 2.38 | (1.076) | 1.70 | (0.819) | 1.71 | (0.665) |
| F値 (df1=3, df2=549) | | 112.45** | | 77.31** | | 64.18** | | 12.87** | |
| 多重比較 | | 女1>男1>女2>男2 | | 女1>男1, 男2, 女2 男1>男2 | | 女1>男1>男2, 女2 | | 男1, 女1>男2, 女2 | |

** $p < .01$

結果、同性間の比較については、痩せたい男性（あるいは女性）は4つの因子得点のすべてにおいて痩せたくない男性（あるいは女性）よりも高い平均値を示すことが確認された。また、どの因子得点についても全体的に女性の方が男性よりも数値が高い傾向にあった。痩せたい男女間、痩せたくない男女間で平均値を比較すると、まず、痩せたい男性と痩せたい女性の間ではすべての因子得点で女性の方が高い平均値を示し、2次的デメリット（因子4）を除く3因子得点で1%水準の有意な差があった。一方、痩せたくない男性と痩せたくない女性を比較すると、1次的メリット（因子1）では痩せたくない女性の平均値の方が5%水準で有意に高かったが、他の3因子得点では数値は女性の方が高いものの男女間で統計的に有意な差はみられなかった。なお、1次的デメリット（因子2）を除く3因子得点において、（男女問わず）痩せたい者は、（男女問わず）痩せたくない者よりも因子得点の平均値が高い傾向にあったが、1次的メリットのみ、痩せたい男性の平均値（2.81）が痩せたくない女性の平均値（2.38）を上回った（ただし、統計的に有意な差はなかった）。

モデルの作成と検討

因子分析の結果、体型に関わる損得意識は4因子構造となり、2つのメリット感と2つのデメリット感から構成されていた。承認欲求（賞賛獲得欲求・拒否回避欲求）から体型に関わる損得意識を媒介して瘦身願望に至るモデルを検討するにあたり、体型に関わる損得意識の因子構造が先行研究（馬場・菅原, 2000; 浦上他, 2009; 内海・西浦, 2014）とは異なっていたため、モデル作成に先立ち、瘦身願望

を目的変数とし、説明変数のうち承認欲求（2変数）を第1ブロック、体型に関わる損得意識（4変数）と落差（1変数）を第2ブロックに投入する重回帰分析を実施した（痩せたい男女333名を分析対象とした）。その結果、拒否回避欲求 ($\beta = .28, p < .01$)、賞賛獲得欲求 ($\beta = .17, p < .05$)の2変数を説明変数とする重回帰式の重相関係数は $R^2 = .11$ ($F(2, 330) = 20.21, p < .01$) となった。そして、第2ブロックに投入した説明変数を含めた重回帰分析の結果 ($R^2 = .54, F(5, 327) = 76.87, p < .01$) では、2つの承認欲求の標準偏回帰係数がともに .07 と有意にならなかった。この重回帰式では1次的デメリットの標準偏回帰係数が $\beta = .36$ ($p < .01$)、2次的メリットが $\beta = .26$ ($p < .01$)、1次的メリットが $\beta = .18$ ($p < .01$) となった。つまり、承認欲求が瘦身願望を直接説明する力は弱いことが示唆された。また、2次的デメリットと落差の2変数は瘦身願望を説明する有意なパスとならないことが確認された。この結果をふまえ、先行研究の知見も参考に、Figure 1のモデルを作成した。このモデルについて、多母集団同時分析によるパス解析を実施した。

分析の結果、適合度指標は $\chi^2(12) = 18.11$ ($n.s.$)、CFI = .991、AGFI = .937、RMSEA = .039 と十分な値を示していた。有意となったパスのみを示した結果が Figure 2（痩せたい女性を対象とした結果。以下、女子モデルと総称する）と Figure 3（痩せたい男性を対象とした結果。以下、男子モデルと総称する）である。これらの図中の数値は標準化したパス係数および重相関係数である。女子モデルと男子モデルの違いは、(1) 1次的メリットから瘦身願望へのパス

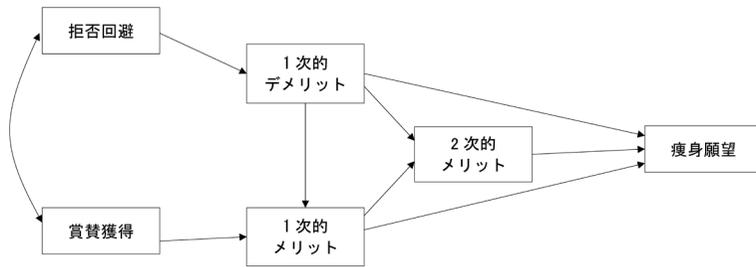


Figure 1 作成したモデル (誤差項は省略)

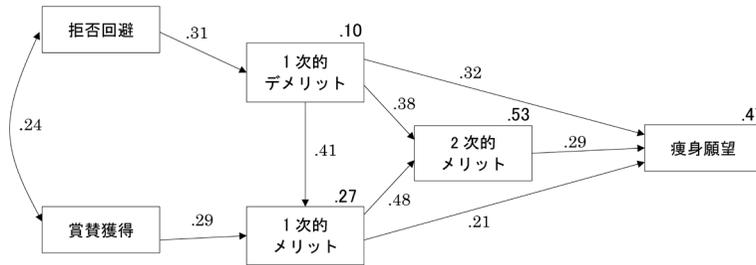


Figure 2 女子モデル (誤差項および有意でないパスは省略)

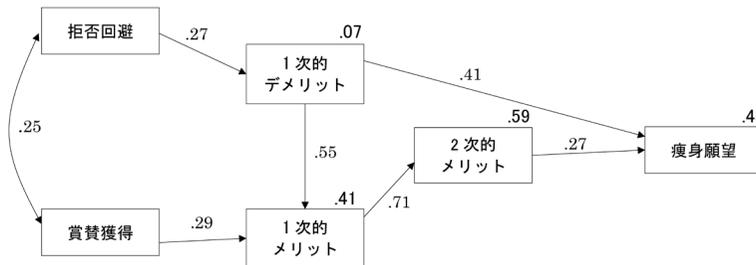


Figure 3 男子モデル (誤差項および有意でないパスは省略)

が女子モデルでは有意であるが男子モデルでは有意ではない、(2) 1次的デメリットから2次的メリットへのパスが女子モデルでは有意であるが男子モデルでは有意ではない、以上の2点にあった。

つまり、痩せたい女性の場合、体型に関わる損得意識が瘦身願望に及ぼす影響のあり方が複雑で、現体型に関するデメリット感や瘦身の1次的なメリット感、および瘦身がもたらす2次的なメリット感のいずれもが瘦身願望を直接強める可能性もある一方で、相互に影響を与え合い、最終的には2次的なメリットを媒介して瘦身願望を強める可能性も示唆された。一方、痩せたい男性の場合、瘦身の1次的メリット感や瘦身願望を強める直接的な要因ではなく、2次的メリット感を媒介することで瘦身願望を

強める可能性が示唆された。また、現体型に関するデメリット感や瘦身に関する2次的メリット感を直接強めるのではなく、デメリット感が1次的メリット感を媒介して2次的メリット感を間接的に強める可能性が示唆された。

考 察

本研究では、瘦身願望をささえる要因としての「体型に関わる損得意識」(瘦身のメリット感および現体型のデメリット感)について、男女青年を対象に因子構造を確認し、瘦身願望に至るモデルの比較検討を行った。

体型に関わる損得意識の検討

まず、「体型に関わる損得意識」は、青年期女性

を対象とした先行研究(馬場・菅原, 2000; 内海・西浦, 2014)ではメリット感とデメリット感がそれぞれ1因子にまとまり, 青年期男性を対象とした先行研究(浦上他, 2009)ではメリット感が2因子(自己視点・他者視点), デメリット感が1因子にまとまっていた。それに対し, 男女のデータを元に因子分析を行った本研究では, メリット感とデメリット感がそれぞれ2因子ずつにまとまった。

メリット感が2因子に分かれたものの, 先行研究とは異なり, 自己視点(自己肯定感や自信), 他者視点(他者からの評価の変化)という構造ではなく, 体型や容姿に関する自他の肯定的な評価が得られるとする1次的メリットと, 痩身に伴い自己肯定感や他者からの信頼の獲得が期待されるという2次的メリットに分類された。なお, 1次的メリットには, 浦上他(2009)の自己視点メリットのうちの「自分の体型や容姿に自信がもてる」という項目, そして他者視点メリットのうちの「異性にもてる」が含まれていた。そして2次的メリットには, 先行研究の自己視点メリットのうち「もっと自由にふるまえる」という項目と, 他者視点メリットのうち「人前で明るくふるまえる」, 「人から信頼される」という項目が含まれていた。つまり, 本研究で示されたメリット感の因子は, 痩身によって自分や他者からの体型への直接的評価が肯定的に変化することを期待する意識(1次的メリット)と, 自他の評価が変化することに伴い間接的に自己肯定感や他者からの信頼が得られるだろうと期待する意識(2次的メリット)の2側面を表現している。この痩身によるメリット感の意識が2側面に分けられるという考えは, 先行研究と重なる部分も多く, 妥当な結果と考えられる。体型や容姿に密接に関連するメリット感と, そこから波及する間接的なメリット感という区分は, 先行研究(浦上他, 2009)の知見を含めて理解可能な構造といえるだろう。

一方, デメリット感については先行研究では1因子にまとまっていたものが, 本研究では2因子になった。デメリット感についても, メリット感同様に, 現体型のままにしていることにより服装が限られ, 体型や容姿に対する周囲からの評価が気になるという1次的デメリットと, 現体型が元となり他者から否定的に評価されることや健康への不安が生じるという2次的デメリットに区分できた。ただし, 痩身

願望に影響を及ぼすデメリット感とは1次的デメリットのみであった。また, 先行研究のデメリット感を構成している項目の内容を確認すると, 馬場・菅原(2000)のデメリット感とは「今の体型のせいで幸せになれない」, 「今の体型のせいで生き生きしていない」等の4項目で, いずれも本研究の2次的デメリットに近い内容であるのに対し, 浦上他(2009)や内海・西浦(2014)のデメリット感とは本研究の1次的デメリットと2次的デメリットの両方の内容を含んでいると考えられる。したがって, 本研究の多母集団同時分析によるパス解析の結果を解釈する際に, 先行研究とは異なる内容である可能性をふまえて1次的デメリットの影響力を考える必要がある。

損得意識が痩身願望に至るモデルの男女比較

次に, パス解析の結果について考察する。まず, 男女ともに, 賞賛獲得欲求が1次的メリットを強めることで間接的に痩身願望に影響を与えていること, 拒否回避欲求が1次的デメリットを強めることで間接的に痩身願望に影響を与えていることが示された。これらの影響力は先行研究と一致しており, 他者からの承認欲求という社会文化的な圧力に関する個人差が「体型に関わる損得意識」に影響を与えることが示された。痩身が賞賛される文化的背景において, 他者からの肯定的な評価を獲得したい賞賛獲得欲求の強い人は痩身がもたらすメリットを意識しやすく, 一方, 自分に対する他者からの否定的な評価を回避したい拒否回避欲求の強い人は, 痩身ではないことによるデメリットを意識しやすいのではないだろうか。

男女ともに1次的デメリットが1次的メリット感を強めることで間接的に痩身願望に影響を与えているという, 先行研究と一致するパスの流れとともに, 1次的デメリットが直接痩身願望に影響するというパスの流れも有意であった。この直接パスは, 青年期男子を対象とした浦上他(2009)には示されているが, 青年期女子を対象とした馬場・菅原(2000)や内海・西浦(2014)にはみられなかった影響力である。この点については, 先述したように本研究でパス解析に用いた1次的デメリットが, 先行研究で用いられているデメリット感と異なる内容を含んでいる可能性を考慮する必要があるだろう。つまり, デメリット感には体型や容姿の見た目への懸念

を中心とする1次的なデメリット感のほかに、現体型が背景となり他者から実際に否定的に評価されることや自身の健康に対する不安あるいは自己肯定感に対する揺らぎが生じるという2次的なデメリット感もある。デメリット感が瘦身願望に直接影響を及ぼさなかった先行研究では、本研究の2次的デメリットを主に測定していた可能性があり、デメリット感が瘦身願望に直接影響を及ぼしていた先行研究では、本研究の1次的デメリットを主に測定していた可能性があるのではないかと考えられる。

最後に、男女の違いとして、本研究の男子モデルでは1次的メリットから瘦身願望への直接パス、および、1次的デメリットから2次的メリットへのパスが有意にならなかったのに対し、女子モデルではすべてのパスが有意であった。まず、1次的メリットから瘦身願望への直接パスに男女で違いがみられた点については、先行研究の知見と一致する部分があり、浦上他(2009)でも他者視点メリット感(本研究の1次的メリットとほぼ同一の内容)は瘦身願望に直接影響を及ぼしていない。女性に関する先行研究ではメリット感が1つの因子にまとまっているため、本研究の知見のみでは断言できないが、男性の瘦身願望は体型に関する自他の肯定的な評価の存在のみでは強まらず、体型について肯定的に評価できる・されることに加え、自己肯定感や他者からの信頼といった2次的なメリット感も生じる場合にはじめて瘦身願望が強まる可能性が考えられる。次に、1次的デメリットから2次的メリットへのパスが、女子モデルでは有意であったのに男子モデルでは有意にならなかった点については、先行研究の知見とは一致していない。ただし、1次的デメリットで測定されている内容が先述のように見た目への懸念に限られていることが、本研究の男子モデルの結果に影響を及ぼしている可能性が考えられる。つまり、青年期の女性においては見た目の不格好さに対する意識の強さが瘦身による1次的メリットと2次

的メリットの両方を強めるのに対し、青年期の男性では見た目の不格好さに対する意識は、容姿に対する直接的な評価の高まりという1次的メリットへの意識を強めることがあっても、瘦身によって自己肯定感や他者からの信頼感が上昇するという2次的メリットへの意識にまでは影響を及ぼしづらい可能性が考えられる。

本研究では瘦身願望の背景因としての「体型に関わる損得意識」の構造を男女で比較し、変数間の関係が男女で共通する点と違いのみられる点を整理した。ただし、これらの変数間の関係のいずれが、摂食障害に影響を及ぼすほどの瘦身願望の強さにつながるか(あるいは、つながらないか)については検討できていない。体型に関わる損得意識の強さが瘦身願望を媒介して食行動に至るプロセスも検討することが今後の課題として挙げられる。

引用文献

- 馬場安希・菅原健介 2000 女子青年における瘦身願望についての研究 教育心理学研究, 48, 267-274.
- 小島弥生・太田恵子・菅原健介 2003 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, 11, 86-98.
- 厚生労働省 2000 二十一世紀における国民健康づくり運動(健康日本21) http://www1.mhlw.go.jp/topics/kenko21_11/top.html
- 厚生労働省 2012 健康日本21(第二次) http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kenkouinippon21.html
- 田中有可里 2001 摂食障害に対する痩せ志向文化の影響 カウンセリング研究, 34, 69-81.
- 浦上涼子・小島弥生・沢宮容子・坂野雄二 2009 男子青年における瘦身願望についての研究 教育心理学研究, 57, 263-273
- 内海貴子・西浦和樹 2014 女子大学生における食行動異常の因果モデルの作成 宮城学院女子大学発達科学研究紀要, 14, 19-24.

(受稿: 2017.4.13; 受理: 2017.9.5)

Appendix I 本研究で用いた「体型に関わる損得意識」の質問項目（メリット感14項目・デメリット感13項目；番号は質問紙に提示した順序）

| メリット感 | デメリット感 |
|---|--|
| 4 今より痩せられたら、健康になる | 1 今の体型のせいで、着られる服のバリエーションが限られる |
| 5 今より痩せられたら、異性にもてる | 2 今の体型のせいで、周りの目が気になる |
| 6 今より痩せられたら、自分の体型や容姿に自信がもてる | 3 今の体型のせいで、格好悪く見られる |
| 10 今より痩せられたら、人前で明るくふるまえる | 7 今の体型のせいで、思うようにふるまえない |
| 11 今より痩せられたら、人から信頼される | 8 今の体型のせいで、身体の調子が悪い |
| 12 今より痩せられたら、毎日が幸せな気分ですられる | 9 今の体型のせいで、服を工夫して体型を周りの人に分からないようにする必要がある |
| 16 今より痩せられたら、もっと自由にふるまえる | 13 今の体型のせいで、他人よりも劣っている感じがする |
| 17 今より痩せられたら、できる人間だと思われる | 14 今の体型のせいで、食べたいものが自由に食べられない |
| 18 今より痩せられたら、もっと身体が軽々と動かせる | 15 今の体型のせいで、周りの人からバカにされる |
| 22 今より痩せられたら、自分の理想とするオシャレが楽しめる | 19 今の体型のせいで、自分に自信がもてない |
| 23 今より痩せられたら、体型のことを考えずに好きなものを好きなだけ食べられる | 20 今の体型のせいで、異性に注目されない |
| 24 今より痩せられたら、周りの人からスタイルが良いと認められる | 21 今の体型のせいで、着たい服が着られない |
| 26 今より痩せられたら、可愛い（あるいはカッコいい）と思われる | 25 今の体型のせいで、どんな服を着てもいまひとつ似合わないと思われる |
| 27 今より痩せられたら、モデルのような人間だと周りの人から思われる | |